

談 話 室

第 29 回日本眼科学会専門医認定試験を終えて

第 29 回日本眼科学会専門医認定試験は梅雨時にもかかわらず今年も晴天の中、平成 29 年 6 月 9 日(金)と 10 日(土)の 2 日間にわたり、東京は渋谷駅近くのフォーラム 8 で行われました。毎年、この猥雑な繁華街の中で開催される試験に、受験生はもちろん、試験監督や口頭試問を担当されるためにお越しになられる先生方も面食らわれていることと思いますが、都内には他によい試験会場もないとのことでした。

今回は淡々と認定試験の結果を中心にご報告させていただきます。

1. 概要

試験は平成 29 年 6 月 9 日(金)の午前 9 時 30 分から一般問題を、午後 1 時から臨床実地問題の筆記試験をそれぞれ 2 時間かけて行い、翌 6 月 10 日(土)の午前 9 時からは受験者 1 名に対して 2 名の試験委員が 15 分ほどの時間をかけて口頭試問を実施しました。

2. 受験者数について

今年の受験申請の受理者数は 292 名で、当日の欠席者を除くと最終的に 283 名(男性 173 名、女性 110 名)が受験しました。参考までに 10 年前の第 19 回の試験の際は過去最高の 592 名の眼科医が受験しておりました。過去 10 年の間、受験者数は年々減少傾向にあり昨年は 248 名にまで落ち込みましたが、ようやく回復傾向に転じてきたようです。なお、今年の 283 名の受験者のうち、初回受験者数は 216 名(76.3%)、再受験者数は 67 名(23.7%)で、この比率はほぼ例年通りでした。

3. 問題数、平均点、合否判定、合格率、ほか

筆記試験は一般問題 100 題、視覚素材付きの臨床実地問題 50 題の計 150 題で行われ、試験終了後、速やかに KV(key validation)委員会を開催し、正答率と識別指数を参考に問題の正当性を検討しました。その結果、一般問題 1 問を不適切問題と判断して採点から除外し、一般問題と臨床実地問題をそれぞれ 100 点満点として計算し直し、両者の合計を加算して 200 点満点として採点しました。今回の採点結果と過去 2 年間の結果を表 1 に示します。例年通り、一般問題はやや難しく、臨床実地問題は比較的好成績でした。

口頭試問については試問の前夜に試問委員全員で実施手順の確認を行い、試問当日の早朝 7 時に委員に対

表 1 筆記試験成績

回		一般問題 (100 点満点)	臨床実地問題 (100 点満点)	総 合 (200 点満点)
27	最高点	84.4	93.9	174.1
	最低点	25.0	42.9	79.4
	平均点	59.2	71.9	131.1
28	最高点	92.9	95.7	184.4
	最低点	30.6	38.3	74.0
	平均点	63.7	69.6	133.3
29	最高点	86.9	90.0	172.9
	最低点	28.3	40.0	76.3
	平均点	65.5	71.3	136.8

表 2 最近 3 年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
27	2015	86.6%	41.5%	73.6%
28	2016	84.9%	30.2%	71.0%
29	2017	91.2%	52.2%	82.0%

して初めて問題を開示し、副委員長から試問の目的と具体的な方法について説明していただきました。そのうえで試問の妥当性、採点の客観性などについて討議し、合否判定基準について委員全員のコンセンサスを得るように努めました。口頭試問の当日は 2 名の委員が一組となって評価を行い、最終的な合否判定は試問翌日の 6 月 11 日(日)に、口頭試問の各班の班長と試験委員会委員長、副委員長による判定会議の場で行いました。

最終的な合格基準は例年通り、筆記試験が 200 点満点で 120 点以上、かつ口頭試問に合格した場合としました。その結果、今回の試験の合格者は 232 名となり、最終的な合格率は 82.0% でした。表 2 に最近 3 年間の合格率を示します。今年は受験生が優秀であったのか、あるいは試験委員の優しさが問題に表れたのか、例年に比べると若干、高めの合格率となりました。なお、初回受験者の合格率は 91.2%、再受験者の合格率は 52.2% でした。

4. 筆記試験問題の作成について

筆記試験問題の作成は全国の指導的立場におられる

約 80 名の出題委員に依頼し、一人あたり一般問題 2 題以上、臨床実地問題 3 題以上の作成をお願いしました。出題して下さった先生方には心から御礼申し上げます。また、不採用となってしまった問題につきましては本当に申し訳ございませんが、いずれもそれなりに理由があつての判断であることを重ねてお知らせさせていただきます。すなわち、いかに良問であっても過去 1, 2 年以内にほぼ同じ内容、あるいは似たような視覚素材が用いられている問題は採用するわけにはいかず、また、あまりに先進的、あるいはコンセンサスが得られているとは言い難い治療法を問う問題などは採用しづらい傾向にありますので、何卒ご了承のほど、お願い申し上げます。

試験問題作成の実際ですが、各先生方から提出していただいた計 590 題の問題をもとに、専門医試験委員会の先生方ならびに副委員長と計 6 回にわたり都内某所で缶詰め状態となって問題の選定とブラッシュアップ作業を行い、全体のバランスを考慮しつつ最終的に 150 題に絞り込みました(図)。毎回、担当の委員の先生方には精神的にも肉体的にも堪える長時間の作業にご協力いただき、感謝申し上げます。

5. 口頭試問

口頭試問は試験委員の先生に出題を依頼し、提出していただいた多くの問題の中から 2 題を選定して 15 分間の試問に見合うように修正や合否判定基準を検討し、最終案をまとめました。

今年の問題 1 は小児の眼位異常に関する質問で、一般的な検査法のほか、検査用器具の取り扱いに関する理解度を確認する問題、問題 2 は小児の心因性視覚障害の症例を提示し、その診断根拠とともに診断確定後の対応、特に保護者への説明の適否を見極める内容で、いずれも筆記試験では推し量ることのできない眼科専門医としての知識と経験を問う問題であったと思います。

6. おわりに

私事で恐縮ですが、私は昭和 59 年の卒業ですので平成元年に施行された第 1 回の日本眼科学会専門医認定試験に受験生として臨みました。移行措置として書類の提出だけで専門医の資格を得ることができた 1 学年上の先輩のことを恨めしく感じたことが昨日のことのように思い出されます。初めての試験ということで受験生としては何をどの程度勉強したらよいものか見当もつきませんでした。当時はこの大事業の企画、



図 試験実施 2 か月前の日曜日、都内の某所で平形副委員長とともにすべての問題の最終チェックをしているところ。

運営に当たった日本眼科学会の事務局はもちろんのこと、試験問題を準備された試験委員の先生方にも同様の戸惑いとお苦勞があつたことと思います。特に臨床実地問題に使用する貴重な視覚素材の提供は、今日のようなデジタルの時代ではありませんので、いろいろなお骨折りがあつたことと思います。私自身、28 年前に受験を経験し、気が付けば平成 17 年から 13 年間にわたってこの試験委員会に関わってきましたが、今後、専門医制度がどのように変わろうとも、知識と経験を問うこの専門医認定試験は肅々と継続されていくものと思いますし、今後も眼科医として社会に貢献していくための関門の一つとして受験生に恨まれつつも続けていくべきであろうと感じています。

最後になりますが、この 2 年間、副委員長として支えて下さった平形明人先生、本部でサポートしていただいた高橋寛二先生、そして日本眼科学会事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

後藤 浩 日本眼科学会専門医制度委員会
試験委員会委員長